

白河学フィールドワーク 12

平成22年5月30日

修学遠足第12回

テーマ・・・郷土（旧大信村）が生んだ中山義秀の見た風景

目的地・・・「碑」の舞台背景、「般若峠」とは、生家跡地を探して、

「泉の側の藪たたみの中に、もう一つ変な碑がたっている。蔦葛に蔽われてちょっと気づかないかもしれぬが、碑の両側に天狗とおかめの面がとりつけてある。天狗の齧顔は鼻高々と東を向き、三平二満のおかめの白面は西を向いて盡きぬ笑をおくっている。峠を東から登ってきた者は天狗の洪面に迎えらるる代り、峠を下る時にはおかめの愛嬌に見送られ、西から登ってくる者は、その反対となるわけだ・・・」
－「碑」より－



「碑」のモデルとされる古峯神社碑

モデル地とされる般若峠は旧会津街道、岡ノ内と滑里川の間であり、今は峠というほどでもなく車で通り過ぎてしまうのだが、強滝川が道を横切って下流200メートルで隈戸川に合流する。橋には強滝橋とあり、すぐ上には滝というより岩を滑る荒瀬が落ち、東側の山裾は湿地となって春先クレソンで轟くも、近年葦が繁って立ち込めない、藪中に露岩の上に古峯神社の石碑がすくっと立っている。碑の頭に何やらの面が二つ浮き彫りになっている。



よく見ると天狗？おかめ？

小説中の天狗とおかめの面の碑は古峯神社と記してあるもので、県内には中通り、会津田島、下郷に多い。旧村内にもあちこちにその石碑があって天栄武隈神社にも巨大な天狗面の碑がある。義秀も子供の頃から天狗の面を眼にしていたに違いない。

この小説の核となる茂次郎の人生は兄弟との関係性や若き頃、江戸に捨ててきた妻子の事や落ちぶれた自作農家に婿入りし、どこか武士の気概をねじ伏せ生きなければならぬ維新後の田舎藩士の宿命を描きながら、舞台装置は峠の碑の風景と茂次郎の野石に座っている時間に凝縮される。なぜ、茂次郎は貧しき旅人や旅芸人や行く場のない病人に善行をふるうのであろうか。彼らに食事や宿を提供し、朝立ちの旅人を村境の峠まで見送った。旅人が峠を下って見えなくなるまで野石に腰を下してじっと見送った。「漂泊にたいする憧れ」という文面もみえる。般若峠という空間は斑石茂次郎の非現実的な人生の「庭」のようなものであったかもしれない。旧会津街道には式内社飯豊比売神社が小型のピラミットのような綺麗な円錐形の山頂に祀られている。陸奥の国の風土記に曰く、白川の郡 飯豊山 この山は豊岡姫命の忌庭なり、また、飯豊青尊、物部臣をして御幣を奉らしめたまいき・・・(ゆにわ)とは神を祀るための斎み浄めた場所。「白河風土記」に丹波盾山(562M)の名の由来に丹波とは児渡(ニト)が訛って丹波(ニワ)と呼ばれたことによる、とある。

小説の舞台は「明治初年以來、藩籍奉還、廃藩置県と時勢が激変すると同時に参勤交代の要路だった街道筋はぱったりと寂れてしまった。それで一番困ったのは荷駄や為替金の運送をとりあつかひ、驛馬や駕をしたてていゝ問屋や宿屋である。」や「梶にとって堪えがたいばかり辛かった夏がやうやく過ぎて山間の小さな城下町に初秋の風のおとづれを聞くようになった。」などの文面から長沼藩が想像させられる。そしてその近辺に(大信)般若峠のある村に婿入りした、と空想させられる。

隈戸川にかかる橋の袂にも草に埋もれた古峯の小さな石碑があった。義秀記念文学館で戴いた「中山義秀文学散歩」というイラスト地図をたよりに生家跡地を探す。整然と河川

改修工事の完了された隈戸川は清い、そして勢いのある水を流しているのであるが、山上湖からの農業用水がこの時期とても大量に放水する。河畔をうろうろしていると散歩の村人に会え、旧生家跡を尋ねると、今は平成10年の大洪水で川も耕地も変わってしまっていて、古い生家（水車付き）があったが流されて、庭先にあった祠だけがそこに残っているよ、と河川沿いの草地を教えてくれた。



生家の跡地



記念文学館で許可を得て撮影転載

文学館では館長や係りの方に丁寧に案内や資料の提供を受け、今年出来上がったばかりの「中山義秀の人と作品」という小冊子を500円で購入する。薄い冊子ながら大変中味の濃い資料集である。末尾に作品の舞台の地図と地名が載っている。「碑」は福島県長沼とある。



4月の遠足で訪れた長沼城跡にある

義秀の「碑」の記念碑